
 実践論文

「イギリス文学入門」—教員養成の観点から

和田 桂子

イギリス文学は8世紀に書かれたとされる叙事詩『ベオウルフ』から現代の『ハリー・ポッター』シリーズまで、広い範囲に渡る。これをどのように組み立てて授業にしていくかは工夫のいる作業である。特に「イギリス文学入門」という科目を、教員養成に有用なものにするためには、単に網羅的で知識重視型の授業にするわけにはいかない。

本論文では、イギリス文学を学ぶ上でのキーワードを定め、それに沿った代表的な作品を取り上げ、それをまず提案する。具体的には＜冒険＞＜階級＞＜キリスト教＞＜多文化性＞の4項目である。＜冒険＞の代表作としてはダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』とジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』、＜階級＞の代表作としてはジェイン・オースティンの『高慢と偏見』とバーナード・ショーの『ピグマリオン』、＜キリスト教＞の代表作としてはシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』とトマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』、＜多文化性＞の代表作としてはジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』とカズオ・イシグロの『遠い山なみの光』を取り上げる。

授業では各作品の概要をなぞるのではなく、実際にどのような英語表現が使われたかを学ぶ。入門科目とはいえ、テキストは「リトルド版」や「簡約版」を避け、なるべくオリジナルのものを使用したい。作家によって選ばれた語彙や表現がどのようなものであったかを知り、そこからイギリス文化の背景を学ぶためである。

「イギリス文学入門」の授業が、英語英文学理解の一助となり、教員養成に活かせるものとなることを願う。

‘Introduction to British Literature’—in view of Teacher Training

WADA Keiko

British Literature covers a wide range of literary traditions from *Beowulf* which is said to be written in the 8th century to *Harry Potter* Series in the modern times. To organize ‘Introduction to British Literature’, it is preferable not to make it too comprehensive or knowledge-oriented but to make it useful for prospective teachers.

It might be effective to find several keywords for British Literature: e.g., (1) ‘Adventure’, (2) ‘Social Classes’, (3) ‘Christianity’, and (4) ‘Multicultural Background’. For each category, two literary works can be selected: Daniel Defoe’s *Robinson Crusoe* and Jonathan Swift’s *Gulliver’s Travels* for (1); Jane Austen’s *Pride and Prejudice* and Bernard Shaw’s *Pygmalion* for (2); Charlotte Brontë’s *Jane Eyre* and Thomas Hardy’s *Tess of the d’Urbervilles* for (3); Joseph Conrad’s *Heart of Darkness* and Kazuo Ishiguro’s *A Pale View of Hills* for (4).

In the class, the emphasis is placed on reading the actual texts to see what kinds of English vocabulary and expressions are used in each work rather than briefly explaining the contents. Although the title of the subject is ‘Introduction’, using the abridged or retold versions will be avoided. By learning the exact words and phrases the authors originally

selected, the background cultures in each literary work will become clear.

It is hoped that 'Introduction to British Literature' will be helpful and useful for prospective teachers to fully appreciate the essence of British language and literature.

はじめに

本論文では、大学の一科目である「イギリス文学入門」を、単なる知識の伝授に留めず、教員養成に有用なものにするための提言をしていきたい。

イギリス文学の授業が本来扱うべき範囲は広い。8世紀に書かれたとされる叙事詩『ベオウルフ』(*Beowulf*)から始まり、中世後期の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)、ルネサンス期のシェイクスピア作品、王政復古期におけるドライデンらの詩、18世紀における『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*)等の小説、19世紀前期のワーズワースらによるロマン主義の詩、19世紀後期ヴィクトリア時代のブロンテ姉妹やディケンズらの小説、20世紀前半のモダニズム文学や20世紀後半のポストコロニアリズム文学、そして現代の『ハリー・ポッター』(*Harry Potter*)シリーズまで、多岐にわたる。

これら百花繚乱の作品群を、入門科目において網羅することは不可能である。むしろ混乱を避けるため、イギリス文学を学ぶ上でのキーワードを定め、それに沿った代表的な作品を取り上げてその背景を知ることこそ重要であると思われる。ここでは＜冒険＞＜階級＞＜キリスト教＞＜多文化性＞というキーワードをもとに、「イギリス文学入門」の授業を組み立てていきたい。

授業では作品のアウトラインを学ぶばかりではなく、実際にどのような英語表現が使用されていたかを調べたい。そのため、入門科目といえどもテキストはなるべく当時のものを使用し、現代風に書き直されたものや児童向けに書きかえられたものは避ける。

＜冒険＞

手に汗にぎるストーリー展開は、多くの読者が文学作品に求めるものだろう。イギリス文学においても、冒険ものは人気を得た。特に『ロビンソン・クルーソー』や『ガリバー旅行記』は、読者の大きな支持を集めた。

(1) 『ロビンソン・クルーソー』

1719年に刊行されたダニエル・デフォー(Daniel Defoe 1660-1731)の『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*)は、日本でもなじみが深い。各種翻訳が出版されているほか、絵本やアニメーション映画の題材にもなり、児童にも親しまれている。これははたしてどのような小説だったのだろうか。

正式なタイトルは以下のようなものである。'The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner: Who lived Eight and Twenty Years, all alone in an un-inhabited Island on the Coast of America, near the Mouth of the Great River of Oroonoke;

Having been cast on Shore by Shipwreck, wherein all the Men perished but himself. With An Account how he was at last as strangely deliver'd by Pyrates.'

まず、'delivered'のかわりに'deliver'd'という書き方がされていること、'28 years'のかわりに'eight and twenty years'と書かれていること、'wherein'という現代ではあまり用いられない関係副詞が用いられていることに気づくだろう。これは、1700年代当時のしゃれた書き方として興味深い。

しかし何より気になるのはこの長いタイトルである。関係代名詞や分詞構文で続けられる長い説明は、読者をうんざりさせたのだろうか。もしそうであれば、扉ページからしてこの作品は失敗作ということになる。もちろんそうではなく、読者の興味を引くために、わざわざこのような説明的なタイトルにしているのである。読者はおそらく、次のように読み進めたのだ。「ロビンソン・クルーソーというヨーク出身の船乗りの話なんだけど」、「(who)この人ときたら、28年もの間一人っきりで無人島で暮らしていてね」、「(having been)というのも船が難破してみんな死んでしまったときに一人だけ助かったからなんだけど」、「(with)結局最後には海賊に救助されたっていうんだ」!!受験英語の模範解答とはほど遠いが、実際にはこのような感覚で読まれていたと考えられる。

もうひとつ読者の興味をそそったのは、これが'written by himself'と書かれていたことだろう。驚くべき実話を張本人が語るという企画は、読者をひきつけずにはおかない。もちろんこの話はデフォーがつくった小説であり、ロビンソン・クルーソーなる人物は存在しない。実在のモデルがあるにはあったが、結局のところフィクションであり、読者はすっかりだまされて、ノンフィクションのつもりでこれを読んだのである。ご丁寧にもデフォーは、'The Journal'というコーナーを設け、1659年9月30日からほぼ毎日つけられた日記を公開している。本人が書いた実話の雰囲気を出すためであり、嘘というよりは読者サービスと考えられる。インクがなくなったのもう書けなくなった、というようなもっともらしい言い訳もついている。実際この小説が大好評を博したため、デフォーは続編も刊行した。

よい文学作品は読者に支えられて後世に残った。そのポイントがどこにあるかを探ることは、作品理解の助けになるだろう。

(2) 『ガリバー旅行記』

ジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift 1667-1745)による『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*)は1726年に出版されたが、これは大ヒットした『ロビンソン・クルーソー』に刺激を受けて書かれたものである。

著者は Lemuel Gulliver となっており、ガリバー本人が自身の経験を書いたことになっている。明らかに『ロビンソン・クルーソー』と同じ体裁である。正式タイトルは *Travels into Several Remote Nations of the World, in Four Parts* で、『ロビンソン・クルーソー』ほど長くはない。しかし章ごとの副題が説明的である。たとえば第1章は、'The Author gives some account of himself and family—His first inducements to travel—He is shipwrecked and swims for his life—Gets safe on shore in the country Lilliput—Is made a prisoner and carried up the country'と書かれている。読者はそれぞれの章の概要をまず把握できるようになっている。ロビンソン・クルーソーと同じく、船の難破によって見知らぬ国に流れつくという設定である。読者は『ロビンソン・クルー

ソー』で得た興奮を再び得るためにページを繰る。そして、この作品が『ロビンソン・クルーソー』を上回るほどの奇妙で不可思議な冒険を提供してくれることを知り、熱狂したのである。

『ガリバー旅行記』は、実写映画やアニメーション映画にもなり、『ロビンソン・クルーソー』以上に広く受け入れられている。しかし、よく知られているのは小人の国と巨人の国の逸話で、全体はそれほど知られていない。実はスウィフトは希代の風刺家であり、過激な描写も多く、出版社が批判をおそれてところどころ改変しているほどだ。日本に関する記述もある。授業ではその日本を扱った Part III Chapter XI を取り上げる。

ガリバーは'Luggnagg'という国を出て、日本の'a small port-town, called Xamoschi'へと到着する。1709 年5月6日に'Luggnagg'の友人たちに別れを告げ、港で6日待機したあと 15 日の航海の末に日本に到着したと、日付まで正確に示している。いかにも実話らしく見せる『ロビンソン・クルーソー』の手法と同じである。この'Xamoschi'という港町は、一説によると神奈川県横須賀市の観音崎であるということだ。発音や綴りがそれとなく似ているほか、'situated on the south-east part of Japan; the town lies on the western point, where there is a narrow strait leading northward into a long arm of the sea, upon the north-west part of which Yedo, the metropolis, stands.'と説明されている位置関係がこのあたりに相当すると考えられるからである。

このエピソードは中学2年生用の英語教科書にも使用された。平成 24 年度版開隆堂出版 *Sunshine English Course* の2年 PROGRAM 5 'Gulliver's Travels'において『ガリバー旅行記』が取り上げられ、ガリバーが上陸したとされる観音崎で「ガリバー祭り」が開催されていると紹介しているのだ。英語教科書は毎年、海外の文化を知るとともに日本の文化を紹介するコーナーを設けており、ガリバーの上陸は外国と日本を結ぶ貴重なエピソードとなった。

'Xamoschi'に着いたガリバーは、天皇にひとつの請願を出す。それは'his majesty would condescend to excuse my performing the ceremony imposed on my countrymen, of trampling upon the crucifix'、すなわち「踏み絵」の免除を願い出るのである。「踏み絵」は江戸幕府が禁止していたキリスト教の信徒を発見するために行われたが、1628 年に長崎で実施され、1858 年に廃止された。ガリバーが到着したとされる 1709 年には、歴史上実際に「踏み絵」が行われていたのである。ガリバーはこのあと'Nangasac'(長崎)に行き、めでたく「踏み絵」を免除されてアムステルダムへ、そしてイギリスの故郷へ帰って行く。

フィクションとはいえ、歴史上や地理上の正確な情報を踏まえたものとして『ガリバー旅行記』は多くの読者を魅了した。当時の日本の状況とあわせて読むとき、この作品は大きな意味を持つだろう。

＜階級＞

イギリス社会が階級社会であったことは周知の事実だ。現代でもイギリスには Upper Class, Upper Middle Class, Middle Middle Class, Lower Middle Class, Working Class といった区別があり、それはアクセント、読む新聞、服装、住んでいる場所などでわかるといわれている。イギリスに階級社会を題材にした文学作品が多いのもうなずける。中でも『高慢と偏見』、『ピグマリオン』

は代表的作品であるといえるだろう。

(1) 『高慢と偏見』

ジェイン・オースティン (Jane Austen 1775-1817) による『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*) は 1813 年に刊行された。この作品も映画化・ミュージカル化されており、恋愛と結婚を扱う作品として、特に女性の注目を集めてきた。この作品に顕著なのはイギリスの階級意識であり、イギリス文学を学ぶ上で避けて通れない作品といえる。授業では、特に主人公エリザベスと甥との結婚に反対するキャサリン・ド・バーグ夫人の口論の場面を取り上げる。

Catherine: The upstart pretensions of a young woman without family, connections, or fortune. Is this to be endured? But it must not, shall not be. If you were sensible of your own good, you would not wish to quit the sphere in which you have been brought up.

Elizabeth: In marrying your nephew, I should not consider myself as quitting that sphere. He is a gentleman; I am a gentleman's daughter; so far we are equal.

Catherine: True. You are a gentleman's daughter. But who was your mother? Who are your uncles and aunts? Do not imagine me ignorant of their condition.

ここでキャサリン夫人は‘family, connections, fortune’のないエリザベスと自分の甥が結婚することを拒絶している。‘Family’が「家族」の意味でないことは明らかである。エリザベスには両親と姉妹がいる。たとえば三省堂『新コンサイス英和辞典』では三番目の定義となっている「家柄」がここではふさわしい。‘Connections’は辞書の定義のはじめに登場する「連結」や「関連」よりも、現代広く使われている「コネ」という意味が最も近い。しかしこのコンテキストでは現代の「コネ」よりも「縁故」や「類縁」の方がふさわしい。自分がつくりあげた人間関係をさすのではなく、端的に自分の血筋と関わりのある人脈をさすからである。‘Fortune’にもさまざまな意味があるが、ここでは「財産」がふさわしい。18 世紀末から 19 世紀初頭のイギリスにおいて、「家柄」「縁故」「財産」がどれほど大きな意味を持ったかをこの作品は示している。だからこそ、それにしばられずに意志を通したエリザベスの勇気に読者は喝采を送ったのである。

またここには‘quit the sphere」という表現が見られる。‘Sphere’もまた、辞書の定義のはじめにある「球体」「天体」でないことは明らかである。三省堂『新コンサイス英和辞典』では四番目の定義「社会階層」がここではふさわしい。つまりここで夫人は、「自分が生まれ育った社会階級」を出て行くことは得策ではないととし、これに対してエリザベスは彼女の甥が「ジェントルマン」であり、自分の父も「ジェントルマン」であることから、二人は同じ「社会階層」にいて何の問題もないと答える。ところがこれに対し夫人は、父親はたしかに「ジェントルマン」ではあるが、母親はどうなのか、叔父叔母はどうなのかとさらに詰め寄る。「家柄」や「血筋」が、遠い親戚縁者までを対象としていたことがわかる。

当時のイギリス社会において「ジェントルマン」が何を意味したかは、しっかり把握しておく必

要がある。もともとは先祖が公爵や男爵の爵位を持った大地主をさしたが、貴族の数が減少し、18世紀には爵位を持たずとも土地を有することで不労所得を得ることのできる有閑階級を意味するようになった。やがて土地を継承することができなかった次男以下がやむを得ず弁護士や医師の職業に就いた場合も、ジェントルマン階級として承認されるようになる。このように時代にしたがってジェントルマンの範囲が広がることになるが、まず爵位、そうでなければ土地、そうでなければ財産、という社会的地位に対する条件が厳然と存在したことは覚えておきたい。現代において漠然と使用されている「ジェントルマン」という用語がこのような意味を持っていたことは、18世紀のイギリス文化を知る上でも、また現代も根強く残っているイギリスの階級社会を知る上でも重要なことである。

(2) 『ピグマリオン』

ジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw 1856-1950)による戯曲『ピグマリオン』(*Pygmalion*)は、1913年に初演された。1964年製作のミュージカル映画「マイ・フェア・レディ」(*My Fair Lady*)の原作としても、この戯曲はよく知られている。

貧しい花売り娘のイライザは、ひどいコックニーなまりでこんな風に話す。‘Ow, eez yə-ooa san, is e? Wal, fewd dan y’ də-ooty bawmz a mather should, eed now bettern to spawl a pore gel’s flahrzn than ran awy athaht pyin. Will ye-oo py me f’them?’ これは誤植ではない。なぜならこのあとに続けてショーの謝罪文が入っているからだ。[Here, with apologies, this desperate attempt to represent her dialect without a phonetic alphabet must be abandoned as unintelligible outside London].つまりアルファベットでこのなまりを表すには限界があるというのだ。彼女のなまりを矯正し、レディとして上流社交界に送り出すこの物語は、映画好きにはおなじみである。

コックニーはロンドンの労働者階級で今も話されている言語であるが、英語教師といえどこれを理解するのはむずかしい。ここではコックニーについて調べる際に役立つ動画と辞書を紹介しておきたい。動画はYouTubeで‘Learn the Cockney accent with Jason Statham’というもの。辞書はDaniel Smith編 *Cockney Rhyming Slang: The Language of London* (London: Michael O’Mara Books, 2015)である。ちなみに上記のイライザのせりふをあえて標準英語に直すと次のようになる。‘Oh, he’s your son, is he? Well if you’d done your duty by him as a mother should, he’d know better than to spoil a poor girl’s flowers and then run away without paying. Will you pay me for them?’ 「母親として息子をちゃんとしつけたんなら、息子は花をめちゃくちゃにしておいて払いもせずに逃げるなんてできないはずだ。ちゃんと支払ってくれるんでしょうね」、といった意味になる。この時の息子が、のちに結婚することになるフレディだ。

さて、厳しい特訓であったとはいえ、たかが数カ月の訓練でなまりのない英語を話すようになったイライザは、まんまと上流階級の仲間入りをする。ショーは、アクセントで所属階級をはかるイギリスの偏狭な階級差別を皮肉るとともに、その浅薄さを嘲笑しているのである。

ミュージカル映画ではイライザとヒギンズの恋は実るようだが、原作は異なる。

Pickering! Nonsense: she's going to marry Freddy. Ha ha! Freddy!! Ha ha ha ha ha!!!! [He roars with laughter as the play ends].

以上が原作のエンディングである。イライザはヒギンズではなく、金もなく職もないフレディと結婚するらしい。舞台でもミュージカル映画でも、観客の好みに合わせてエンディングはヒギンズとの結婚をにおわせるものになったが、ショーは断固として反対した。彼はこの作品の「後日談」に、このようにはっきりと書いている。

This being the state of human affairs what is Eliza fairly sure to do when she is placed between Freddy and Higgins? Will she look forward to a lifetime of fetching Higgins's slippers or to a lifetime of Freddy fetching hers? There can be no doubt about the answer.

彼女はこれからずっとヒギンズのスリッパを持って来る生活を選ぶのか、それともフレディにスリッパを持って来させる生活を選ぶのか、というのである。イライザは今や選ぶ自由を得た。そして彼女はフレディを選ぶのだ。このようにショーは階級にも男性にも隷属することのない自立した女性を描いた。映像作品は魅力的だが、映画を見て作品をわかったつもりになるのは危険である。英語を教える立場になる者には、ぜひ原作を、ショーの「序文」と「後日談」も併せて読んでほしい。

＜キリスト教＞

イギリス文学とキリスト教は切っても切れない関係にある。ジョン・ミルトン(John Milton 1608-1674)の『失楽園』(*Paradise Lost*, 1667)やジョン・バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678)などは、キリスト教文学の古典といつていい。このように明確にキリスト教を扱った作品以外にも、キリスト教がベースになっている作品は多い。むしろキリスト教にまったく触れていない作品を探す方が難しいといえる。それほどイギリス文学にはキリスト教が浸透しているのである。ここでは比較的読みやすい『ジェイン・エア』と『ダーバヴィル家のテス』を取り上げる。

(1) 『ジェイン・エア』

シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë 1816-1855)の小説『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*)は、1847年に刊行された。美貌に恵まれないながら反骨精神を保持し、自らの信念に従って生きる主人公ジェインは、新しいタイプの女性として反響を呼んだ。ジェインは一介の家庭教師でありながら主人ロチェスターとの恋愛に走る。しかしけっしてキリスト教の教えに反した行動を取ったわけではない。

ロチェスターに妻がいたことを知ったジェインは、彼の求婚を断る。心は千々に乱れるが、彼を残してソーンフィールドを立ち去るのである。懇願するロチェスターに対し、ジェインはこう言う。

‘Do as I do: trust in God and yourself. Believe in heaven. Hope to meet again there.’ ‘God keep you from harm and wrong — direct you, solace you — reward you well for your past kindness to me.’ 信心深いとはいえないロチェスターを、ジェインはまるで神父のようにさとすのだった。

そしてロチェスターが屋敷も妻も視力も失ったとき、二人は再会する。この時、ロチェスターは神の深遠なる導きを信じるのだ。‘Jane! you think me, I daresay, an irreligious dog: but my heart swells with gratitude to the beneficent God of this earth just now.’ と彼は言う。‘irreligious’とは聞きなれない言葉だが、もちろん‘religious’の反意語で「不信心な」の意味である。以前不信心だった彼は、今や神の力を次のように表している。

He sees not as man sees, but far clearer: judges not as man judges, but far more wisely. I did wrong: I would have sullied my innocent flower — breathed guilt on its purity: the Omnipotent snatched it from me. I, in my stiff-necked rebellion, almost cursed the dispensation: instead of bending to the decree, I defied it. Divine justice pursued its course; disasters came thick on me: I was forced to pass through the valley of the shadow of death. His chastisements are mighty; and one smote me which has humbled me for ever.

上記の‘The Omnipotent’(全能の神)、『Divine justice’(神の正義)、『the valley of the shadow of death’(死の陰の谷)「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが」詩篇 23 章4 節)、『His chastisements’(懲らしめ「彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え」イザヤ書 53 章 5 節)といった言葉は、不信心な者の口から出るものではないだろう。すべてを失ったかに見えたロチェスターは、逆にあふれるばかりの神の恵みを受け取ることになる。

気性の激しい子供であったジェインは寄宿学校で神の存在を知り、やがてロチェスターを信仰に導いた。この小説は男女の激しい恋愛感情を扱いながらも、その底に流れる神の導きを描いている。映画やミュージカルでなじみ深い作品だが、使用されている語彙に注目することで新たな発見があるだろう。

(2) 『ダーバヴィル家のテス』

トマス・ハーディ(Thomas Hardy 1840-1928)が 1891 年に出版した『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*)は、問題作として話題を呼んだ。日本でも多くの翻訳が刊行されている。テスという無垢な美しい少女が不幸の連続の末に殺人を犯して死刑になるという設定は、救いのないものに見える。

エンジェルという男性と結婚することになった時、テスは子供を死産したことがあると告白する。それはアレクという男性に凌辱された結果であった。するとエンジェルは彼女を冷たく拒絶するのである。エンジェルは牧師の息子であり、毎日のように聖書に親しんでいる。エンジェルという名前そのものが、また聖書を想起させる。ところが一だからこそ、というべきか—彼は、テスをどうしても許すことができない。

‘I repeat, the woman I have been loving is not you.’

‘But who?’

‘Another woman in your shape.’

She perceived in his words the realization of her own apprehensive foreboding in former times. He looked upon her as a species of impostor; a guilty woman in the guise of an innocent one.

エンジェルにとってテスは、無垢な女性のふりをした罪深い女性(a guilty woman in the guise of an innocent one)である。‘Guilty’と‘Innocent’の対比はしばしば聖書や祈祷書に見られる。たとえば旧約聖書の「箴言」(Proverbs)17章15節にはこのように書かれている。‘Acquitting the guilty and condemning the innocent—the Lord detests them both.’ (悪しき者を正しいとする者、正しい者を悪いとする者、この二つの者はともに主に憎まれる)。彼にとってテスは詐欺師(impostor)でしかない。愛も許しも与えることができないのだ。

新約聖書の「テモテへの第二の手紙」3章13節に、‘impostor’は出てくる。

While evildoers and impostors will go from bad to worse, deceiving and being deceived.

悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。

自らの過失ではなく、暴力的に無垢の殻を破られたにもかかわらず、聖書の言葉どおり「落ちていく詐欺師」として自分をさげすむエンジェルを、テスは絶望的に見つめるしかない。彼女はこのあと実際に「落ちて」いき、人を殺して自らも死刑になる。ここにはハーディのキリスト教への懷疑が表れているのだ。

‘Impostor’といった単語は決して頻出する単語ではなく、必ずしも覚えておくべき単語とはいえない。しかしイギリス文学作品にはこうした聖書にかかわる単語が非常に多く出現する。文学作品のみならず、聖書の語句はイギリスの日常生活にも溶け込んでいる。これは英語を学び、教える際には少なくとも頭に置いておく必要があるだろう。聖書の用語索引としては、Alexander Cruden 編 *A Complete Concordance to the Holy Scriptures of the Old and New Testaments* (NY: Fleming H. Revell, 1944)などが有用である。

＜多文化性＞

イギリス文学は、アメリカ出身の T. S. エリオット(T. S. Eliot 1888-1965)やアイルランド出身のジェイムズ・ジョイス(James Joyce 1882-1941)らの作品も含み、もともと多文化性を持ったものである。今後はさらにそれが加速するものと思われる。ここではロシア帝国キエフ県に生れ、船乗りの経験を生かしてコンゴを舞台にした作品『闇の奥』を書いたジョゼフ・コンラッドと、日本に

生れたカズオ・イシグロを取り上げる。

(1) 『闇の奥』

ジョゼフ・コンラッド(Joseph Conrad 1857-1924)作『闇の奥』(*Heart of Darkness*)は1902年に出版された。舞台はイギリス本国ではなく、アフリカのコンゴである。そこにはイギリス植民地主義の暗い影がくつきりと描かれている。

授業で取り上げるのは、クルツがアフリカ大陸の奥地で死を迎える場面と、ロンドンに戻ったマーロウがクルツの婚約者と会う場面である。コンゴの密林で象牙の売買にかかわっていたクルツは、*'The horror! The horror!'*「恐怖だ、恐怖だ」と叫んで息絶える。文明の光が届かないジャングルで、彼はまさに*'Heart of Darkness'*を目の当たりにして死を迎える。そしてアフリカ人の若い男が、*'Mistah Kurtz—he dead.'*と舌足らずな英語で彼の死を告げるのである。ロンドンに戻ったマーロウは、クルツの婚約者のもとへ急ぐのだが、町の様子はこのように描写されている。

I found myself back in the sepulchral city resenting the sight of people hurrying through the streets to filch a little money from each other, to devour their infamous cookery, to gulp their unwholesome beer, to dream their insignificant and silly dreams.

上記の描写の中に*'sepulchral'*という単語が登場する。けっして頻出単語ではないが、*'sepulcher'*(墓)の形容詞であり、新約聖書の「マタイによる福音書」23章27節に登場する単語である。

Woe unto you, scribes and Pharisees, hypocrites! For ye are like unto whited sepulchers, which indeed appear beautiful outward, but are within full of dead men's bones, and of all uncleanness.

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。

コンラッドがここで*'sepulchral'*という言葉を選んでいるのは、死んだような町を表すのみならず、偽善者の町という意味をこめたためであると考えられる。この町で人々は、金をくすねあい(*filch*)、ものをむさぼり食い(*devour*)、ビールをがぶ飲みし(*gulp*)、無益でおろかな(*insignificant and silly*)夢を見るのだ。未開の地*'Heart of Darkness'*から帰還したはずのマーロウは、繁栄を誇っているロンドンにこそ*'Heart of Darkness'*があると感じる。マーロウがクルツの婚約者と会ったとき、彼女は彼の最後の言葉を聞きたがった。

'His last word—to live with,' she insisted. 'Don't you understand I loved him—I loved him—I loved him!'

I pulled myself together and spoke slowly.

‘The last word he pronounced was—your name.’

マーロウは真実を告げることができない。‘I could not tell her. It would have been too dark—too dark altogether...’それはあまりに「暗い」からであり、その「暗さの中心」(Heart of Darkness)にあるものを、婚約者はけっして理解することはないだろうからである。

イギリス文学が問題提起したものは階級差別や貧困や偽善であったが、読者はしだいに外から見たイギリス社会にも関心を示すようになる。植民地から見た宗主国のありさま、イギリスが誇った文明というものの vulnerability を、読者はこれらの文学作品に見ることになるのだ。

(2) 『遠い山なみの光』

カズオ・イシグロ(Kazuo Ishiguro 1954-)による『遠い山なみの光』(当初邦題は『女たちの遠い夏』とされていた。 *A Pale View of Hills*)は1982年に刊行され、同年王立文学協会賞を受賞している。カズオ・イシグロは両親ともに日本人だが、5才のときからイギリスに住む。『遠い山なみの光』は、出身地長崎が舞台となっている。授業では、主人公エツコの記憶の中にある長崎の描写を取り上げる。

It is possible that my memory of these events will have grown hazy with time, that things did not happen in quite the way they come back to me today. But I remember with some distinctness that eerie spell which seemed to bind the two of us as we stood there in the coming darkness looking towards that shape further down the bank.

この時、サチコの娘マリコの姿が見えなくなり、最悪の事態も想定しつつ、サチコとともにエツコは野原を探している。記憶はぼんやりとして(hazy)いるのだが、その時の薄気味悪い(eerie)思いと、次第に暗くなっていく様子(the coming darkness)だけは鮮明に蘇ってくる。結局娘は無事に発見されるが、彼女にこのあと幸福な生活が約束されているわけではない。

エツコの回想は断片的でバランスを欠いている。読者は彼女の回想に導かれて、暗く不気味な答えの出ない過去をさまよう。日本の家屋の薄暗さ、たとえば‘Aside from the stove, an old hanging lantern Sachiko had lit provided the only source of light, and large areas of the room remained in shadow.’といった背景描写は、エツコの回想のおぼつかなささをさらに際立たせている。こうした不確かな回想は、イシグロの後の作品、たとえば『わたしたちが孤児だったころ』(*When We Were Orphans*, 2000)で描かれる上海の回想、『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*, 2005)で描かれる施設の回想にも受け継がれており、イシグロ作品を特徴づけるものとなっている。

カズオ・イシグロのような日系イギリス人の処女作が王立文学協会賞を受賞したことは、現代イギリス文学の多文化性を物語るものである。彼はこのあと、やはり日本人を描いた『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986)でウィットブレッド賞を、『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989)でブッカー賞を獲得し、2017年にはノーベル文学賞を受賞した。

日本においても中国人作家ヤン・イー（楊逸 1964-）が『時が滲む朝』(2008)で芥川賞を受賞し、アメリカ人作家リービ英雄(Ian Hideo Levy, 1950-)が『星条旗が聞こえない部屋』(1992)で野間文芸新人賞を、『模範郷』(2016)で読売文学賞を受賞した。このような傾向は各国の文学界においてますます進むだろう。「イギリス文学入門」では、こうした多文化性にも注目していきたい。

おわりに

本論文では＜冒険＞＜階級＞＜キリスト教＞＜多文化性＞に分けて代表的なイギリス文学作品の一部を解説した。入門の授業においては網羅的であるよりも、イギリス文学の特徴をコンパクトにとらえることが重要である。この授業で学ぶ内容が、英語理解の一助となること、教員養成に少しでも活かせるものとなること、そしてイギリス文学への興味を育て、さらなる探究へと導くものであることを願う。

参考文献

- Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (London: W. Taylor, 1719)
Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (London: Benj Motte, 1726)
Jane Austen, *Pride and Prejudice* (London: T. Egerton, 1813)
Bernard Shaw, *Pygmalion* (London: Constable, 1929)
Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (London: Smith, Elder and Co, 1847)
Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan, 1912)
Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (Harmondsworth: Penguin, 1973)
Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills* (London: Faber and Faber, 1991)

聖書の引用は King James version, 日本語訳は口語訳を使用した。